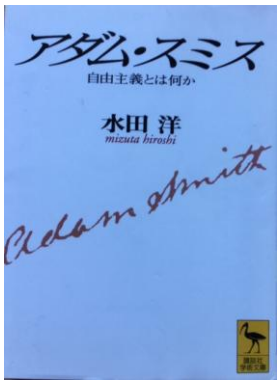
8年前の入院中に読んだ水田洋『アダム・スミス』

ふと8年前の目の手術で、名古屋市立大付属病院に入院した時のことを思い出した。

2週間の予定の入院生活なので、どの本を持っていこうか迷った。荷物がたくさんあり、なるべく小さく軽いものとして、表題と写真の本を持って行った。手術前と術後にうつむき姿勢でじっくりと何度も読んだ。かなり前に読んだことはあるが、今回新たに多くの知見を得ることができた。ずっしりと重い本だ。



「自由主義とは何か」という副題の本書は、講談社学術文庫として1997年に出版された。著者の水田洋先生はアダム・スミス研究の文字通り第一人者であり、コンパクトながら、じつに読みごたえがある。とりあえず、まえがきを紹介しよう。

「この本はアダム・スミスの伝記であるが、かれの生涯のこまかい経過を追うよりも、その思想の全体をスケッチすることを目ざした。今日でもなお、アダム・スミスといえば、『国富論』の著者であり、自由放任と見えない手の経済学者であるとされることが多いが、かれは道徳哲学の教授であって、『国富論』はその一部分を展開したものにすぎなかった。それどころか、かれの思想活動は、天文学史、文体論、言語起源論、法学、芸術論など、広範な領域におよんでいて、かれの経済学も、そういう全体のなかに位置づけなければ、十分な理解は困難なのである。

さいわい、ここ30年ぐらいのあいだに、いまいったような一面的なスミス理解は、しだいに修正されつつあり、グラスゴー大学版スミス著作集の刊行が、そのような動向におおいに貢献したことはいうまでもないが、太平洋戦争の直前にはじめられた日本の本格的なスミス研究は、それに先鞭をつけたといっても、過言ではないだろう。この本では、そういう日本のスミス研究の伝統を継承するとともに、著作集が提供した広範な資料をできるだけ引用して、スミス思想の全貌をあきらかにしようと努力した。

いうまでもなく、限られた紙数でわかりやすく、という条件のもとでは、全貌といっても限界があるが、そのために水準をさげたつもりはない。著者としてはむしろ、小著ではあるが国際的にも前例のないこころみとして、ひそかに自負しているのだが、研究者の常識として、研究の完成などとは夢にも思っていない。つぎの一歩のための階段をひとつ築いたということである。

（2023年10月14日）